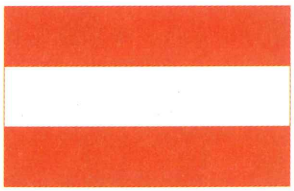
高知県立坂本龍馬記念館だより

飛騰

平成８年５月
第17号



海援隊旗

菜の花の送り

高知県立坂本龍馬記念館
館長　小　椋　克　己

「竜馬がゆく」の作者、司馬遼太郎さんが亡くなられて４か月が過ぎました。早過ぎた旅立ちで残念ですが、その「竜馬がゆく」の最後の部分『…天に意志がある、としか、この若者の場合思えない。天が、この国の歴史の混乱を収拾するために、この若者を地上にくだし、その使命がおわったとき惜し気もなく天に召しかえした。……』これは、そのまま司馬さんにも通じると思うのです。

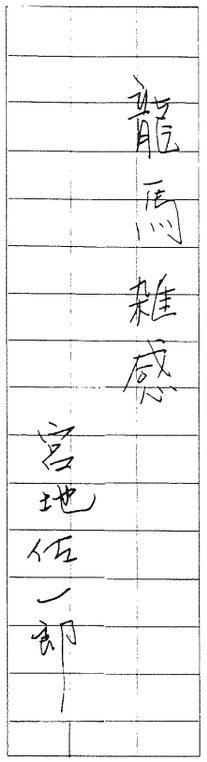
３月10日、司馬遼太郎さんを送る会が大阪のホテルで行われました。等身大の遺影と、司馬さんの好きだった菜の花が丘のように飾られた会場で、３千人余りの参列者が菜の花を献花。作家田辺聖子さんは「偲ぶことば」として、常に日本のあり方を問うていた司馬さんが「日本の背骨のゆがみ」を憂いながら逝かれたことに触れておられました。

ところで、この「竜馬がゆく」の想をあたためていた頃のことを書いた、司馬さんの屏風が私どもの記念館にあります。

メッセージは、昭和３年生まれの銅像の龍馬が還暦を迎えた昭和63年５月、桂浜で行われた「龍馬先生銅像建設発起人物故者追悼会」に寄せられたもので、その中に「私は30年前ここに来て、はじめてあなたに会ったとき、名状しがたい悲しみに襲われました。そのときすでに、私はあなたの文章を通して精神の肉声を知っていましただけに、そこにあなたが立ちあらわれたような思いをもちました。『全霊をあげて、あなたの心を書く』と、そのときつぶやいたことを、私はきのうのように憶えています」という言葉があります。資料を整えることでは群を抜く司馬さんですが、すでに昭和30年代の初め、龍馬の手紙を読み、ニュアンスを把握しておられることが分かります。「竜馬がゆく」の新聞連載は昭和37年からで、同じように「日本」を考えた龍馬の姿を次々と展開していったのです。

司馬遼太郎さんが去る二月亡くなられた。司馬さんのことは、東京龍馬会の「龍馬タイムズ」第三十六号に書いたところへ、四月十四日、「斬」「戊辰落日」の直木賞作家で、龍馬に詳しく著書もある綱淵謙錠さん逝去の報に接した。

お二人とも大正後半の世代で、司馬さんは私より一つ年上、綱淵さんは私と同年同月生まれであった。但し私が二週間ほど先に生れていて（大正十三年九月六日）、私のことを「兄貴、兄貴」と云ってくれた。勿論冗談であって、文学の上でははるかな兄貴で、T・S・エリオットの研究をはじめ、樺太生れの北方の視点から幕末維新の幕臣や志士浪人まで、巾広く歴史小説を構築された作家であった。以下、私ごとで恐縮であるが、私は「坂本龍馬全集」編述刊行後、未知の綱淵さんから巻紙に筆書きの手紙を頂いた。昭和五十五年五月の或る日だった。その日以来の交友であった。



「最近、光風社刊『坂本龍馬全集』を入手することができ、いろいろと勉強させて頂いております。それにしましてもこの『全集』のために払われた努力と労力の大きさに脱帽の思いが致しました。小生も出版勤務のときは全集刊行の仕事に携わった事もありますので、一層その素晴らしさが胸に響きます。

この『全集』は単に龍馬関係の史料を網羅しただけのものではございません。これ一冊が一篇の歴史文学であり、これを編集された人の偉大な作品でございます。なまなかの歴史小説を書くよりも、遥かに優れた作品を産み出されたことであり、欽羨の至りに存じ上げます。本日はこの『全集』を手にしたときの感動と喜びを、お伝え致したく筆を執った次第でございます」

はじめてもらう綱淵さんの筆跡は雄勁で美しい。まことに思いがけない過褒に恐縮した次第である。

不朽の名著「坂本龍馬関係文書」（第一、第二）を編述した岩崎鏡川のことを、横浜在住の御子息岩崎英恭氏は偲んで、次のように書き残している。

「奇傑坂本龍馬が朝廷と高知藩の努力を背景として、当時の雄藩と折衝し遂に大政奉還の機運を招来した事蹟に、不朽の意義があるとすれば、その筆蹟の跡を精査探求し当時の史料をそのままに編纂した本書（「坂本龍馬関係文書」二冊）の価値も亦、維新参考史料として没すべからざるものがなければなりませぬ。父（岩崎鏡川）は近年八十冊近く並んだ史籍協会の刊行本を眺め入りながら、『かうして史料が後に残るようにしておけば、つまらぬ著述をするより、いくら後世の為になるかわからぬ』とよく申しておりました。此の点において父は、維新史研究者であるとともに、維新史料のかなりに忠実なる保護者の一人でありました」（大正十五年七月五日、亡父五十日祭記念岩崎英恭発行「坂本龍馬関係文書」第一、序文）

私は、綱淵さんの云う「なまなか歴史小説を書くよりも遥かに」「史料が後に残るようにしておけば、つまらぬ著述をするよりいくら後世の為になるかわからぬ」と、岩崎鏡川のいう言葉を実感し、痛感した。私が殆ど二十年前、「龍馬全集」を編述したのは、岩崎が私を呼び

寄せてくれたと思っている。

「龍馬全集」を編述したのは、昭和四十年代の終りから五十年代にかけて五年ほどを費して成った。平尾道雄先生が在世中で、監修して頂ける幸運に恵まれた。昭和四十八年文学の先輩大佛次郎が亡くなった直後から編述取材を始めた。

大佛は晩年の大作「天皇の世紀」で「長州」「諸家往来」「大政奉還」等、最も多くのページを使い、情熱を傾けて書いた人物は、龍馬であった。私には「君が若い頃から集めた資料で、龍馬とお龍を軸に長篇をお書きなさい」と云われたことがある。私は昭和三十年代からいつか小説で龍馬を描こうと思って資料を集めていた。しかし私は小説の代りに「全集」を編述した。その頃、司馬さんの傑作「竜馬がゆく」が完結しており、この名作を越えることの困難を知って小説を放棄した。そして集めた資料によって、私の見果てぬ夢を「全集」に托した。

この世の中で、龍馬という不世出のすばらしい男に出会い、また大勢の龍馬に惚れた人々の、学恩から友情に支えられた「全集」であった。私はこの幸せを感謝している。

「元親の新城は潮の香の流れる浦戸湾頭にある。後は松籟の鳴る山つづきである。その山の鼻に城が築かれていた。海に臨み、不落の態勢を構えている。松が鳴り砂と波が響きあって、調和のある音叉を奏で止まらない。一望の裡に波濤のたえまない土佐灘がつづき、景色は絶佳と云ってよい。

一望遮るもののない紺碧に拓けた、大海原に向いあっていると、己の挫かれた志、見果てぬ夢が息をふき返して、また新しく開けてくる」

長宗我部元親が浦戸に城を築き、岡豊（おこう）城から入城したのは、天正十九年（1591）の頃である。

龍馬の手紙の前で　筆者

かつて私は歴史小説「闘鶏絵図」で元親が、四国征覇の野望に破れた後、ここに城を築き城内で軍鶏を戦わせて、九州戸次川合戦で長男信親を喪った痛手を慰める場面を描いた。元親が城内戌の角で軍鶏を飼い、堀の丸で谷忠兵衛ら家臣の鶏と蹴合いをさせたのも、すべて私のフィクションであったが、冒頭に描いた風景は変らず、四百年を在りつづけて生きているのである。

今日、「高知県立坂本龍馬館」は、この城跡に建っている。設計コンペ最優秀作、ワークステーションの高橋晶子氏の名作である。ハーフミラー仕上げの総ガラスの建物は、さえぎるもののない太平洋、黒潮に突き出して建っている。長宗我部の城跡には、平成三年、モダンな「龍馬館（やかた）」が誕生したのである。

龍馬生誕百五十年記念事業実行委員会の方々の奮闘と功績である。委員長沢村拓夫氏、殊に副委員長橋本邦健氏は、総髪の龍馬姿で全国行脚。実行委の人々と共に、七年に及ぶ募金活動の結集成果であった。

コミニュケーション、英知、人材育成は龍馬の心である。「坂本龍馬倶楽部」は、さきの実行委員会を受け継いで、二十一世紀に向けて発足すると云う。豊麗斬新な「龍馬城」から夥しい夢、希望、ロマン、出会いが誕生することであろう。

企画展

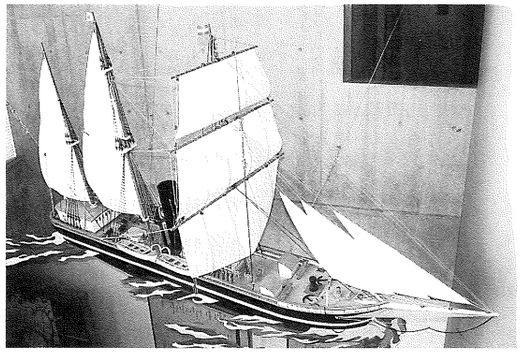
『龍馬　海の軌跡展』

－サスケハナからハマカゼまで－

平成８年３月20日（水）～５月31日（金）

昭和56年、高知市仁井田神社で「夕顔丸」の絵馬が発見された。夕顔丸は龍馬の「船中八策」誕生の船として有名である。奉納時期は不明であるが、江戸時代仁井田には造船所や船倉があり、土佐藩海軍の根拠地でもあった。おそらく藩の船奉行配下の者が、航海安全を祈願して奉納したものであろう。

そのイメージモデルが完成した。企画展はその記念展示である。



嘉永６年６月３日、サスケハナ号を旗艦に浦賀に来航した黒船は、龍馬に「異国の首打とる」と攘夷の炎を燃えあがらせたが、それは青年龍馬の目を世界に開かせ、奔走回天の起点となった。

この龍馬にのちの亀山社中、海援隊へと構想拡大の糸口を与えた者がいた。高知城下の画家河田小龍である。中浜万次郎のアメリカ体験訊問や、自らの遊学による広い視野と鋭い時代認識から生れた鎖国不可能論や、大艦必要論は、「君ハ内ニテ人ヲ造り、僕ハ外ニ在テ船ヲ得ベシ」と龍馬に言わせた。

勝海舟との出合いは、国家改造を視野に入れた「日本の洗濯」を開始させた。海軍操練所の活動、下関砲撃事件、薩英戦争、急進尊攘派の動きなどのなかに、龍馬は目ざす日本の方向を学んでいった。亀山社中の活動が、薩長連合の締結に大きな役割を果したのも、蝦夷地開拓の構想も、下関海戦参加も、世界の海援隊を目ざしたのも、夢実現への着実な歩みであった。しかし社中の活動も、ワイルウエフ号の遭難や大極丸問題で、そして海援隊についてもいろは丸沈没、イカルス号事件の嫌疑等々、龍馬の意図するようには進展しなかった。

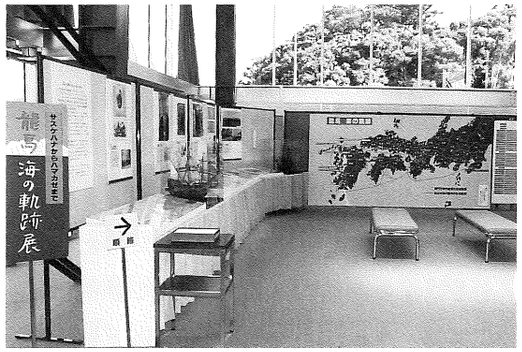
昭和３年５月27日、高知県青年たちの手によって、龍馬は銅像となって後人への教えを示した。除幕の日、駆逐艦ハマカゼは桂浜沖に錨をおろし、32名の乗組員も除幕の式に参列し、往年の海援隊長に敬礼した。

龍馬の海での活動は、文久２（1862）年12月、順動丸で勝海舟に随行して品川から兵庫への航海からはじまる。『海舟日記』や『坂本龍馬手帳摘要』、その他先学の研究成果から龍馬の海の軌跡をたどることができる。江戸から大阪、大阪から下関、そして長崎から鹿児島へ、あるいは兵庫から須崎、須崎から下関・長崎等への往復等々、慶応３年10月須崎から大阪までの最終航海まで、その記録に残るものだけでも30航海を越え、航行距離も２万キロを越えるものであった。使用された船も、順動、翔鶴、黒龍、胡蝶、三邦、桜島、いろは、夕顔、震天、空蝉をはじめ、係った船も10船を越える。船は当時最高の速度、大量輸送の交通手段であり、兵器としてもすぐれた力であり龍馬の行動を支えたものであった。

『備後鞆津ニ於テ才谷梅太郎紀州高柳楠之助ト応接筆記』『薩州様帆前船之記』『西洋軍艦構造分解図説』の文献史料と、龍馬の手紙からいろは丸事件を捉えてみた。

『備後鞆津ニ…』は『いろは丸事件始末書』とも言われ、鞆ノ津におけるいろは丸の衝突・談判・結末の経過筆記である。筆記者は不明であるが、土佐藩庁への報告文書であり、全体に朱書を加え推敲のあとがみえる。４ｍにおよぶ長文史料で、交渉に命をかけた龍馬の気迫がみなぎり迫力ある本館所蔵の文献史料である。

『薩州様帆前船之記』（江崎作兵衛）は、ワイルウエフ号遭難に伴う調査内容と、その取り計らいの詳細な記録文書である。生存者の証言や死者の収容・引き上げ物資の状況などの記録から、ワ号事件全様の把握も可能となる。『薩州御手船異国形帆前船難船之始末』（安永惣兵衛孟貞控）とともに、ワ号遭難始末記として長崎県有川町が保存する貴重な文書である。



『西洋軍艦構造分解図説』は、幕末のオランダ通詞本木正栄が、文化年間に作成したものである。西洋軍艦の全体図、内部構造、断面など各部の詳細図に解説も含めた精緻な分解図である。龍馬の手にあったとはされるが、それを証する確たるものはない。ただ本木から勝、そして龍馬というルートも考えられないことはなく、表装表書には「元治元年土州坂本龍馬所有」と記している。琴平海洋館所蔵文書である。

龍馬の手紙からいろは丸沈没事件を捉えることも試みた。事件発生の慶応３年４月28日から解決する１ヶ月間に残した18通の手紙に緊張した龍馬の心がうかがえる。紀州藩の対応を「不解第一」と責め、「何れ血を不見ばなるまい」とする決意、そしてお龍へは「戦争覚悟の交渉もやりとげたのでご安心、お龍のいる下関へも寄りたかったが、後藤と京都へ行くので、それがすんでから寄る」と、お龍への想もふくめ、いろは丸事件によせる龍馬の意気と心の推移を８通の手紙から捉えてみた。

このほか、参考品として、いろは丸沈没海域の海底からの引上げ遺物や、有川町でワイルウエフ号の舵棒として保存している木製品に関する資料も展示した。

イギリス国立海事博物館に「海洋情報センター（Maritime information centre）がある。龍馬のかかわったGerard（三邦）Bahama（明光）Emillyw（横笛）Shanghai（若紫）Viola(海問)Hiogo（胡蝶）Sarah（いろは）Union（桜島）Shooeyleen（夕顔）Wild wave（ワイルウエフ）Dinkey（順動）Lyon（震天）についてその写真・設計図及び各船に関する資料やエピソード等の調査を依頼した。全船について「ロイズ船舶登録筌」（ロイズ船舶協会によって調査された1867年以降の全ての船と、1867年以降外国に渡った100t以上の船の記録）や「商船リスト」（英国船籍の船全てのリスト）等からの調査による報告を受けた。しかしShooeyleen（夕顔）について、ロイズ船舶登録法の記載事項、実測図等現在残る記録で最高のものの存在が報告された以外は、注目される資料を得ることはできなかった。

多彩な内容で設立総会を開催

坂本龍馬倶楽部　植田　英

全国の龍馬ファンの皆さま、県立坂本龍馬記念館のバックアップ団体として準備を進めてまいりました「龍馬倶楽部」が、本年４月１日に正式に「坂本龍馬倶楽部」として発足いたしました。現在会員数309名ですが、日ごとに会員数が増加しております。

さて、６月８日（土）の設立総会に向けて準備を進めてまいりした準備会では、下記のとおり多彩な内容で設立総会を開催することにいたしました。

場所は龍馬記念館の船中八策の広場を利用して行います。ステージのバックは太平洋であり、会員の席は広場や階段ということになります。まず最初に総会を行い、会の約款や活動方針、組織人事などを決めます。つづいて「坂本龍馬の刀剣趣味」という演題で、東京在住の刀剣研究家小美濃清明氏の記念講演を行います。小美濃氏はさきごろ『坂本龍馬と刀剣』（新人物往来社）という本を出版され、注目を浴びている人物であります。講演内容は、龍馬には刀剣蒐集という趣味があったという興味深い話であります。龍馬の研究家たちが今まで知りえなかった新しい視点から龍馬像を分析いたします。

アトラクション「龍馬太鼓」は太平洋をバックに勇壮なバチさばきを見せてくれます。

その後、龍馬記念館を見学していただいた後は隣の国民宿舎「桂浜荘」に会場を移し、懇親会を兼ねた分科会を行い、その後大懇親会へと盛り上がっていく予定であります。

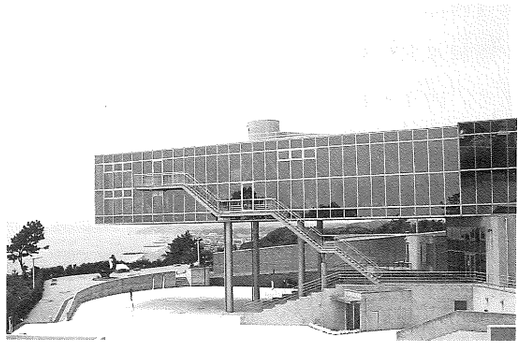
なお、倶楽部の運営でありますが、記念館に事務所を置き、会員の入会手続きや会報の発送や会員への情報の提供などを行います。事務局は当館に置きますが運営はできるだけ県内の会員において実施していく予定でありますので、当館において県外の会員さんとの交流や情報交換もできるものと思っております。

また、連休などの休日には会員による館の案内などのお手伝いをしながら、龍馬の精神や生き方などを学ぶ研修も行っていきたいと思っております。

会報についても、当面は龍馬記念館の機関紙「飛騰」の紙面をお借りして情報の発信をしていきますが、将来は会独自の会報を考えております。

情報提供につきましても、パソコン通信の掲示板やインターネットのホームページを介した両方向のコミュニケーションを図っていきたいとも考えております。今後とも「坂本龍馬倶楽部」のご支援をよろしくお願いいたします。

引き続き会員の募集はおこなっておりますので、興味のある方は当館までご連絡下さい。



設立総会の会場となる「船中八策の広場」

みどりの風吹く

～ゆかりの地から～

第８回全国龍馬ファンの集い
北海道大会実行委員長　荒磯　力央

「然ニ土佐のいもほりともなんともいわれぬ、いそうろうに生れて一人の力で天下うごかすべきは、是又天よりする事なり、かふ申てもけしてけしてつけあがりはせずますますすみかふて、どろの中のすずめがいのように、常につちをはなのさきえつけ、すなをあたまへかぶりおり申候。……」龍馬が姉乙女に送った一文ですが、今の私たちにとっては龍馬の真情溢れる名文と云うより座右の銘としたい一文だと考えて居ります。

3,000人に満たない北海道の一寒村に全国大会が開ける。龍馬の友が多士才々の方々と共にやって来ると考える度に不安感と緊張感が胸中を走ります。浦臼町は平成11年に開基百年を迎えますが、明治37年頃に聖園小学校に於いて龍馬遺品展が開催されて居りますが全国からのファンの皆様をお迎えするのは初めての事です。町史に残される催事と云っても恥ずかしくない「集い」で在りたいと願って居ります。

龍馬と浦臼、それは元治元年、龍馬が勝海舟にその想い「坂本竜馬下東右船にて来る……数十人皆、蝦夷地開発通商、為国家慣発す……」を語る事に始まり、其の後幾度か座折を見るが其の想いは明治27年に入って甥の直寛によって実現の方向に向ったのです。ゆかりの地としての浦臼町との係わりも実にこの時生れました。明治31年には浦臼沼辺りに異風とも思われる洋館風の住宅を建て家族共々先に聖園を理想として入植した土佐の自由民権論者、武市安哉の農場に入っている。明治32年には坂本直（龍馬養嗣子）の妻留、子の直衛ほかが来浦しています。大正に入って留、直衛は他界。今も札的の高台には両名の墓石がみどりに広がる聖園農場を眼下に静かに眠って居ります。

今、浦臼は聖園農場を始め坂本一族が画いたであろう、メロン、カンロ、東洋一のワイン畑を始め穫れぬ物はないと云われる農産物の植付、種蒔の大忙しの時期ですが皆様をお迎えする７月の下旬にはふくよかな香りと緑いっぱいの沃野が龍馬の夢と共にお待ち出来るものと存じます。

徳川300年の重圧を撥ねのけた男、坂本龍馬が姉乙女に「この節は○㊟がなく候」と送った手紙、海援隊「高松太郎」の記銘票等々についても町教育委員会の協力を得て特別展示する準備を推めて居ります。

「人生邂逅し、開眼し」を楽しみに町民共々お待ちして居ります。末尾になりましたが、高知県、高知市、小椋館長始め全国竜馬会の皆さんの格別の御指導を感謝し励みにさせて戴いて居ります。　1996年５月10日

第８回　全国龍馬ファンの集い
北海道大会

日時：平成８年７月27㈯（受付：12：30より）
場所：浦臼町農村センター他
大会内容：基調講演
全国龍馬ファンの集い北海道の旅

夏の企画展
ぼくの龍馬・わたしの龍馬 イメージ画展ご案内

新しい「日本」を創るため命がけで駆けめぐった坂本龍馬。日本の向かうべき方向を指し示しながら、実現を目前にして33歳の生涯を閉じました。その間、龍馬はいくつもの大きな仕事を、なし遂げていきました。その活躍の場面、その時々に見せた笑顔や得意顔、真剣な表情など、皆さんの心に浮かぶ「龍馬」やその仲間たちをイメージ画にして送って下さい。

▲応募のしかたは次のとおりです。

①A4サイズ以下の用紙に描いて下さい。

②応募作品の裏面には、郵便番号住所、氏名、年令、電話番号を必ず書いて下さい。

③作品の送り先：〒781－02 高知市浦戸城山 高知県立坂本龍馬記念館「イメージの画の係」

④締め切り：平成8年6月20日㈭必着。

⑤審査：漫画家はら・たいらさんをお迎えして最優秀、優秀、入賞などの作品を選び、その作者に、賞状と記念品（作品のテレカ）をさしあげます。

⑥展示：7月20日㈯～9月1日㈰ 坂本龍馬記念館1階北側企画展示コーナー。

⑦お問い合せ：坂本龍馬記念館 ☎：0888－41－0001

もう、かなりの数の作品が寄せられています。皆さんの楽しい傑作をお待ちしています。

7年度最優秀 池上友和君の作品

坂本龍馬倶楽部会員からのメッセージ

5月上旬現在の入会者は、高知県は勿論、大阪、兵庫から沖縄まで34県にまたがっていて、龍馬の全国区ぶりを裏付けていますが、交流もはじまっています。

★甲府市中町　長坂雄司さん（No.310）

ご自身のインターネットホームページに、倶楽部への入会案内、7月20日から記念館で行うイメージ画展応募要領などをのせて、協力して下さっています。アクセスする方は→htpp：／／www. ccs－y. com／ryouma／へどうぞ。

★神奈川県海老名市　高瀬豊司さん（No.215）

海に関するお仕事をしておられた方で、ワープロで所感を送って下さいます。

「旗」……龍馬は海援隊約規とともに隊旗も制定した。龍馬亡きあと海援隊は解散したが、同郷の岩崎弥太郎が海軍部門を引継ぎ、やがて三菱会社へと発展させた。この時岩崎は、三菱会社の社旗を作ったが、山内家の「三つ柏」と岩崎家の「三階菱」の二つの家紋を組み合わせて、現在も使われている「スリーダイヤ」を旗印とした。そして三菱の海運部門、日本郵船会社の社旗に、坂本龍馬が「二曳（ニビキ）」と呼んでいた海援隊旗（飛騨表紙参照）のデザインを改良して取り入れた。

岩崎、この社旗をやはり、「二曳」と呼んでいた。（4／26のお便りから抜粋）

☆名古屋市緑区　渡邊忠雄さん（No.276）

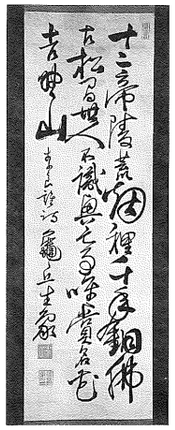
5万円札の署名をやっていますか？（はい。）支部単位のまとまりも考えて下さい。

☆静岡県焼津市　村松初代さん（No.143）

昭和44年のＮＨＫ大河ドラマ「竜馬がゆく」を再放送する運動を起こしませんか。

（ＮＨＫにはＶＴＲがないそうで、残念！！）

新資料の紹介



◆後藤　象二郎著

十二帝陵荒煙裡
千年銅佛古松間
世人不識興亡事
唯賞名花吉野山
相不良誰詩　亀丘生象

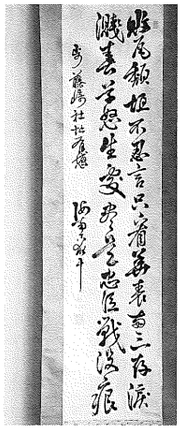
◇土佐藩主山内容堂に登用され、武市瑞山ら土佐勤王党の志士を処刑した。

後、龍馬の船中八策を容れ土佐藩をして幕府に大政奉還を建白させ実現した。

◆佐久間　象山書

江梅爛漫開高樹
特立漱霜不怯寒
未認清香満天地
癡人猶作杏花看
象山子明

◇信州松代藩士、幕末の思想家で兵学者。江戸遊学中の龍馬に砲術を指南したと伝えられている。



◆谷　干城書

敗瓦頽垣不忍言
只看華表両三存
涙濺春草怒生處
盡是忠臣戦没痕
歩藤崎社址有感
海南古狂干

◇龍馬暗殺現場に駆け付けた。西南戦争では、熊本城を死守した名将。

＊新職員紹介＊

主事　西笛貴久代

4月1日より勤めさせていただいております。満開の桜の春に感激し、龍馬も眺めたであろう、太平洋の青さ、雄大さに感激している毎日です。今まで忙しさにかまけて忘れかけていた、ゆったりした気分を久し振りで味わっております。

これからは新緑、また夏のジリジリとした太陽などを龍馬の生き方、人となりなどと合せて、味わいにぜひご来館下さいませ。普段は直接おめにかかれません。事務所で庶務、経理を担当させていただいておりますが、龍馬に会う機会を与えてくださったことに感謝し、これからも勉強させていただきなから勤めていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

入館状況

平成8・5・20現在（開館以来1650日）

○総入館者数		635,270人
○最多入館	平成5・5・3	3,700人
○最少入館	〃 6・9・29（台風）	23人
○7年度最多入館	〃 7・5・4	2,618人
○7年度最少入館	〃 7・12・21	35人
○7年度1日平均入館者数		369人

題字「飛騰」について

文久元年（1861年）10月11日、龍馬は剣術修行のため、1か月の国暇を得て、讃岐丸亀の矢野市之丞の道場へ旅立った。この日、樋口真吉は、日記に「坂龍飛騰」と記した。

龍馬は更に国暇延長の許可をもらい、極秘裡に長州へ赴いた。彼は武市半平太の久坂玄瑞宛親書を携えていたのである。

長州萩に着いた龍馬は、久坂玄瑞を訪れて半平太の親書を手渡し、国事について会談する。

今まで一介の武芸者に過ぎなかった龍馬が、この旅を機に勤王の志士へと脱皮していくのである。矢野市之丞の所へ行った目的を予め知っていた樋口真吉は、龍馬への期待をこめて「坂龍飛騰」と記したのであろう。翌2年3月、龍馬は脱藩する。

拝啓 龍馬殿

● 前回龍馬さんが逝った同じ歳の33歳の時、これからの自分が何をなすべきかを考えるために高知をおとずれてから、再び4年後の今日、おとずれました。

その間には、結婚、転職と身の回りにも色々な事が起りましたが、常に敬愛する龍馬さんを目標に人生を生きております。

今二世の誕生を期待しておりますが、男の子だったら“龍”くんと名付けようと思っております。

（2月12月　京都市　S・Y　男性）

● 私は21歳の学生です。今は故郷を離れ京都で勉強中です。何故桂浜に来たのかはっきりしたことは自分でもわかりませんでしたが、ここに来てみて自分が何を求めていたのかわかった気がしました。

最近の世の中道理がかなってない事が多く、学生ながら憂いています。こんな人間が一人いてもいいでしょう。

今はピストルを持って道を開くことはできない時代ですが、己の武器たるものを学生時代に身に付けて社会に出ていきたいと思います。

日本の夜明け……　楽しみです。

（2月14日　山口県　T・M　男性）

● 貴方の言葉、「日本の夜明けは近いぜよ」に魅かれ“日本の夜明けを求めて、幕末維新の旅”と称し、京都から友人とやってきました。桂浜で貴方と同じよ海を眺めた時、貴方の言葉を体で理解できたように思います。本当に来てよかった。京都に戻ったら、京都時代の貴方に会いに行きます。

「自由は土佐の山間より出づ」、この太陽と風、そして山、海が貴方達を生んだということがよくわかりました。

（3月4日　京都市　M・A　女性）

● 書籍を目のあたりにすると、本当に生きていたんだなと改めて感動を覚えました。

新婚旅行のときに乙女姉さんに宛てた手紙がとても楽しいものになっていて龍馬らしいなと思いました。

それから龍馬が歩いた場所を示すランプがあんなに色んな地点でめまぐるしく光っていたのに、33歳のときに京都でぱたりと消えてしまうと、なんとなく悲しさで一杯になりました。

血染の屏風には鳥肌が立ちました。

それにしてもお龍さんが再婚していたのにはショックを受けたなあ。私ならしないぞ。

（3月17日　愛媛県　F・A　女性）

● わたしは、今5年生ですが、歴史はとっても大好きです。その中でも龍馬は好きです。海えん隊は、どんなことをするかわかりませんが、龍馬がえらいということはわかります。

龍馬は小さいときは弱虫だったんですよね。それをおとめ姉さんがきたえてとても強い人になりました。毎日々々えらかったでしょうね。龍馬は優しかったんですね。そう考えたわけは親友がたくさんいるからです。

（4月21日　香川県　T・Y　女性）

館だより　“飛　騰”　第17号
平成8年（1996）5月1日発行
発行所　高知県立坂本龍馬記念館
〒781－02　高知市浦戸城山830
TEL　(0888) 41－0001
FAX　(0888) 41－0015